

2020年3月17日付 建設通信新聞 第10面 (最終面)

重要分野にポイント絞り効率的に学習

前回までは電気通信工事施工管理技術検定や試験制度の改正について主に紹介したが、今回は施工管理技術検定全体の傾向を分析していく。

■敵を知り己を知れば百戦危うからず
試験傾向を知ることが、合格するための第一歩。国家試験である施工管理技術検定は土木・管工事・電気通信工事、電気工事・建築などの科目で実施されるが、どの科目についても学科試験（四肢択一

のマークシート方式）と実地試験（記述式）に分かれており、両方に合格することで施工管理技士に合格となる。

学科試験の合格率はほぼ横ばいであるが、合格基準の正答率60%以上を得点できれば全員合格も可能な試験であり、努力が反映されやすい試験といえる。

■なぜ、試験傾向を知る必要があるのか
試験内容は、例えば、土木施工管理技士試験であれば、大きく分けて「土木一般」「専門土木」「法規」「共通工学」「施工管理法」の5分野となる。どの分野も学習範囲は広く、単純な暗記では合格することは難しい。

どの分野においても、知識の習得には地道な演習が必要だが、出題可能性の高低に関係なく闇雲に学習していたのでは時間がいくらあっても合格レベルの実力に到達するのは難しい。ただし、施工管理

技術検定は勉強のポイントさえ外さなければ決して合格できない試験ではない。

■最重要分野の『施工管理法』

どの学科試験の出題区分にも配点が最も高い『施工管理法』という分野がある。優先順位を付けずに学習を始めると、実務経験で馴染みのある専門分野に注力しがちである。しかし、1級土木施工管理技術検定でいうと、専門分野については34問中、わかる問題を10問しか解答できず、この範囲をすべて学習することは受験対策上、効率的ではない。施工管理技術検定は、工事現場を指揮する最高指導者としての資質を問う試験である。そのため、施工を管理する方法を問われる『施工管理法』の配点が高いのは当然のことといえる。つまり、短期間で合格を勝ち取るため、まずは施工管理法に注力すべきである。そして、次に重要な分野

を挙げるとすれば『法規』である。

法規は法律の専門家だけしか関係ないと考えている受験生も多いが、法律を順守しつつ管理を行うため、一定の知識は必要となり重要度が高い。また、他の分野と比較すると出題範囲が絞ることができ、受験対策としての優先順位は必然的に上がる。1級土木施工管理技士試験であれば、施工管理法と法規が満点であった場合、合格基準の60%の39点となり、この2分野で合格することも可能となる。（表参照）

■「時間も費用、社会人が合格（うか）るには効果的な学習が不可欠

施工管理法が重要といっても、施工管理法だけでも範囲が広く、網羅的に理解しようとするのは、合格することだけを考えると非効率である。どの分野においても、出題傾向があり、合格のために

1級土木施工管理技士試験 学科試験
出題数と各出題比率 令和元年度例

出題区分	出題数	解答数(A)	解答数に対する比率(A/B)
土木一般	15問	12問	18.4%
専門土木	34問	10問	15.3%
法規	12問	8問	12.3%
共通工学	4問	4問	6.1%
施工管理法	31問	31問	47.6%
計	出題 96問	解答 65問 (B)	100.0%

※学科試験は出題区分により回答数が異なるのは学習範囲を絞る必要がある。ただし、受験生が自分で試験を分析し傾向をつかむのは難しい。

そこで、受験対策講座を活用する方法がある。例えば、日本建設情報センター（CIC）の講座では専門講師が試験傾向などの指導を行っている。努力すれば独学でも合格は可能だ。しかし、時間も大きな費用である。せっかくの学習時間を効果的に利用するために、短期で合格するためにプロが組み立てた講習会に参加することも考えてみてはどうか。（日本建設情報センター）

資格取得の視点から
見つめる建設業 ③

